

函本
 五可思
 譚
 傷雙
 放家僧

13
 2895
 4



四
六
一

門 へ 13
2895
巻 4

繪本復讐放下僧下之末卷

第十一編 根十郎山夢条 三鳥詣条

諸君も根十郎信俊は鎌倉に控置左殿門を討て立
退しが本州相模の産如とバ其方に至るは其の根十郎
左殿つと云ふは食ちと其を軍學武術に精
くわむ誰と云く國の守軍召と其ハ之を左殿が
言を以て中一天島流の陰謀持南をとめ立
日にゆて追く取立に成る知行二百石二十

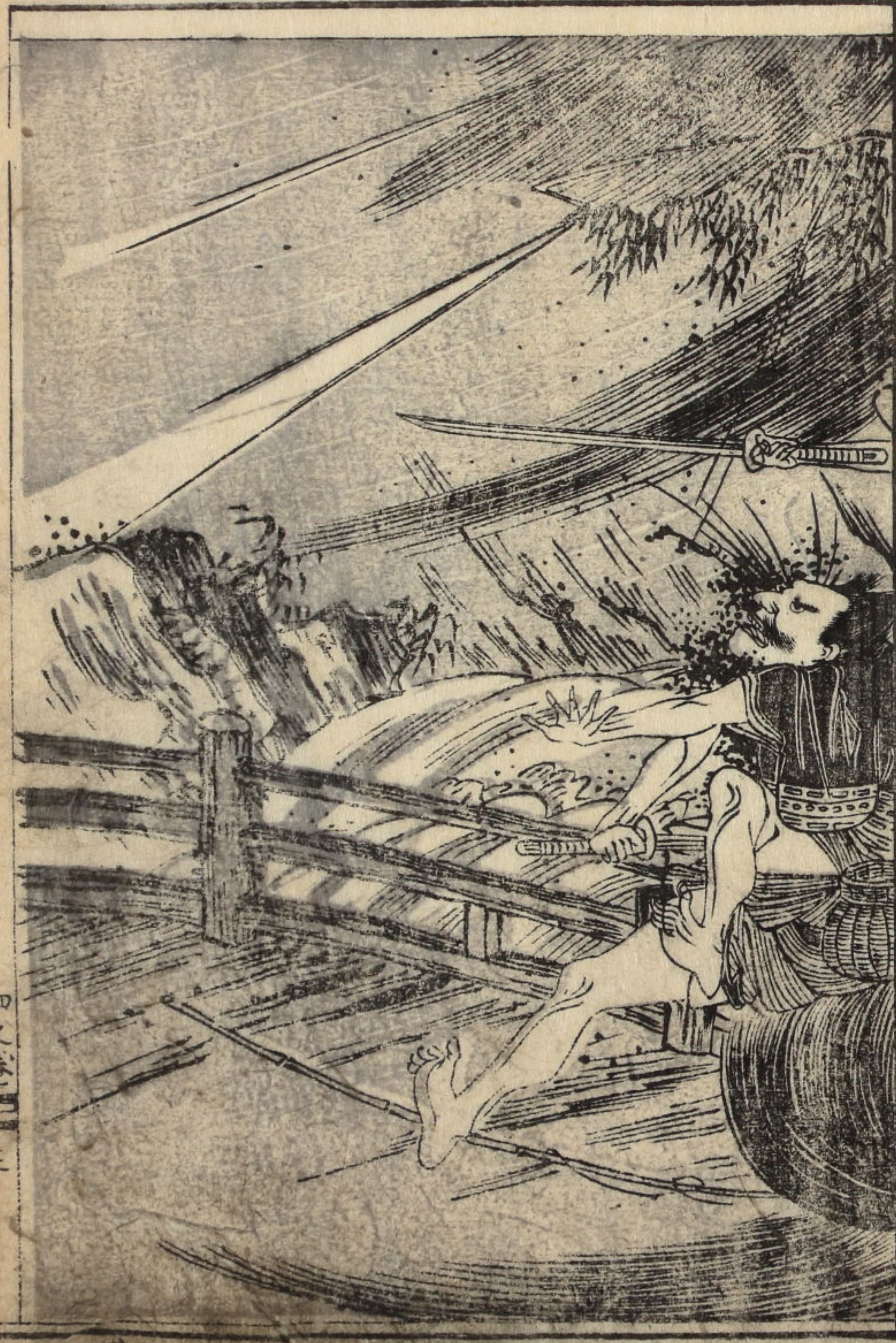


昭和
三月三日
末

貫文のまゝもあはれまゝのあはれ鎌倉出奔乃
とて朋友に決て妻をとも引とて
何れもあはれまゝあはれあはれの頃より
を好むをまゝとてまゝあはれ
の胸中にく悟道をひらき終つてわとして此
以亦續をまゝあはれまゝあはれ
或は夢にゆめをまゝあはれまゝあはれ
あはれまゝ武洲の門弟多くたもあはれ

心を死すまゝの直好まれば自然に五徳をまゝあ
ゆつてあはれまゝあはれまゝあはれまゝあはれ
いと好む所の親生僕一人に約束をたもあはれ
ふまゝ小河の約束あはれまゝあはれまゝあはれ
日風色のあはれまゝあはれまゝあはれまゝあはれ
響きまゝあはれまゝあはれまゝあはれまゝあはれ
つ凍の風まゝあはれまゝあはれまゝあはれまゝあはれ
北まゝあはれまゝあはれまゝあはれまゝあはれまゝあはれ

信俊の夢中左衛門入道



四之卷
三

高く岩をくぐりて渡る橋あり 龍は大河に漲る喬
くまの太橋ありて 黒き橋上を渡る雷
光眼を注ぐめと 山河動揺し 是れもさるる
つらんかとおもふ 十郎怖と立ちしんとす
橋上よ左衛門が怨毒忽然とあつてさもねん
十郎是をえりて 逃げしんとす
つ歩も進ぶと 河原にどけし橋上を
とおもつて 左衛門利とみとふの上 刀根が者

先十郎の如く 断下りたる十郎七轉八倒してうんと
一声叫びて 妻女が耳ふ入る 何ぞとまじりて目
をさへさせや 動起しけり 刀根ハ神くら付
まじりてと 居間なり 扱はしとす
まじりてと あり 懼しめりて 指さるる大息
つて 身の汗をぬき 涙をぬき 好むる妻女
ありて 抱ふとす 介抱つて しが
ありて 声ぬき 告ぐ

十郎ハ拍掛下し。日頃の勇氣も一時に挫け。唯
我々くしくあつて。彼ももたざる。十郎ハおのが慢
心より。うろくゆへに。心を生じ。えま悪の消滅
す。あつて。あつて。身をくろく。も。所謂
くわくを思ふ。と。あつて。十郎はく
おのつ。が。時ハ佛神を秘が。あつて。伊豆州
三島明神と神。あつた。あつて。身の祈誓
あつて。あつて。あつて。あつて。神ハ心禮

を。あつて。命の極。十郎ハ兼て。あつて。あつて。
あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。
興の。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。
あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。
僕人二人をつ。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。
伊豆の三島。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。

十三編 榎野兄弟仇復条 本領安堵条
伊豆の州三島明神と歌中にあつて。あつて。あつて。あつて。

大山祇命あしそ祈雨の神也。治美のひより代々
將軍あそき恭ありて社影末は覺をそとそと
室藏三重の塔鳥居随分門あそ社藤山魏々々
しそ社あの中あそ鷲鷹鷗あよよ社ひの臭
測に確らそそ瑞籬うへ鴈鷄も夏祢が靴
に起るべしそ風あそそ松の響にあらそ鈴の声
ハ生昔鎮座より二十有余歳常に絶る所そ
神徳日々にあふしそ生来の貴賤詣りて普く

社傳を仰ぐ。所謂此社の社令ふしそ商人諸
職の店あそり社あそ昌社地あそりそはそ
は社あそ兄弟あそ常陸を去り相州あそ越え俳徊
あそ十郎あそ伊豆のあそ社あそ
うに軍あそ是あそひそ急あそ彼州に軍あそ中
三つに都會あそは社あそ社あそ社あそ社あそ
に武運あそつあそ人あそ社あそ社あそ社あそ

まづの初に信儀ハ明神に奉告し下向道に報
たるとが樓門より斗きくがくを地生
所不持聖兄弟ノヤリ信儀ハ彼ノ二人が面体を
もまきや又そびすこ海ををやけびまるとい
てまき船の出立ぬらんあまは傍迫くま言ふ
をみぬし。旁ハ信神ありて相持にまき船を添
今一人ハ弓矢を射すやかたぐふまあぬら面
この宗作のゆきまらぬ二人ハ樂が音きき

此もくろみと高稚み船すあま体ハあま
別傳にて言にゆきまらぬらまらぬら
あま神もあまあまあまつる時ハ宗つふあまの
乃翻る風の勢をえとてと禅はゆきまらぬ
まらな郎ハ這厨まらあまら悟しゆと一向各の
信人ハ忽日ハの慢ら群ハ面白く去あま
弓矢を帯きゆきまらぬらまらぬらまらぬら
はまらぬらまらぬらまらぬらまらぬら



海らうしとあまが咽がえにすらかとたふ
うんと倒く見せふ小はら一向年花き
坊らう少十郎附むむと。確ちあそく後家業
拍板うけく勅下控バ流石名にあつ信條も何
あハらうく母つづも洞どたをれぶは直ま
あつてつるあめを刺バ見ま雅もあまを断
伏也。足子より小十郎が首かこ切互ふ影をえ
合を芝えふとらち笑くまは使身あの人々感



はらうしとあまが咽がえにすらかとたふ
うんと倒く見せふ小はら一向年花き
坊らう少十郎附むむと。確ちあそく後家業
拍板うけく勅下控バ流石名にあつ信條も何
あハらうく母つづも洞どたをれぶは直ま
あつてつるあめを刺バ見ま雅もあまを断
伏也。足子より小十郎が首かこ切互ふ影をえ
合を芝えふとらち笑くまは使身あの人々感



四之卷
十一



祝禎
眉野
くま

此書昔傳々々々を形に於て免許を寺院修飾
 料給寄附ありて兄弟の眉を字々々々在催
 君の居仁惠と作事り退出に及ぬを信小治郎八
 国にありて。因本伊織が妹に耕左衛門が娘却由
 をとて。祝言佃ひま婦がまらふも留て。榮久
 一書盤木の松の系を此代をぬ。例を此の二
 此。謡曲傳つても万代不易多形の徳ぬと
 画本復讐言放下僧下之卷大尾

画本物草太郎

全五册

畫者 芦國 近刻

復讐言瀨川譚

全五卷

同 追刻

鐘卷昔物語

全五册

鐘卷市郎左衛門の蹟
 因果ものかくりを
 追出而

維時文化三歳丙寅仲秋良辰兑行

書律

東廠山下谷廣小路

伏水屋卯兵衛

